

会話における述語省略表現の発話機能

——「ば・たら・と・なら」節を中心に——

杜曉傑（筑波大学大学院生）

要 旨

本稿では、日本語会話コーパスを用い、「ば・たら・と・なら」節における述語省略表現の発話機能を分析し、非省略表現に対する特徴を考察し、その発話機能の全体像を提示した。また、対人機能に関しては、主張を表す演述発話、報告要求の演述発話と依頼への承諾を表す策動発話は対人配慮の効果を有している。さらに、使用頻度の面において、述語省略表現は策動として使用されることが多く、演述として使用されることが少ない。最後に、会話参加者の親疎関係から見ると、述語省略表現は非省略表現より親しい関係で使用されやすく、特に親しい関係における策動の発話は述語省略表現で表現されることが多い。

キーワード：条件節、述語省略表現、発話機能、対人機能、親疎関係

1. はじめに

本稿は、日本語の述語省略表現、特に条件節における述語省略表現（以下、述語省略表現）が会話においてどのように使用されているかを考察し、非省略表現に対する特徴を究明しようとするものである。日本語において省略表現が頻繁に使用されており、日本語の特徴の一つともとらえられている（水谷 1989 など）。一方、述語省略表現は日本語の規範文法においてほとんど議論されておらず、日本語教科書における記述も不十分なものが多いため、日本語学習者にとってその理解と適切な使用が難しいと指摘されている（朴 2010 など）。そこで、本稿は、日本語自然会話資料を対象に、発話機能の視点から述語省略表現の使用様相を考察し、その特徴を明らかにしていきたい。

2. 先行研究

2.1. 述語省略表現の用法

日本語の述語省略表現は、近年、多くの研究者に取り上げられており、その対象の範疇（白川 2009）や、会話における談話的・対人的役割（陳 2000、朴 2010、高木 2015、楠本 2015 など）が研究されてきた。

中島（1997、1999）は接続助詞「と」・「ば」・「たら」・「なら」の用法について調査を行っている。具体的には、職場における女性の話ことばを対象に、接続助詞「と」・「ば」・「たら」・「なら」の用法を分析し、条件接続用法と非条件接続用法という二分法を提唱している（表 1）。

表 1 中島（1997、1999）における条件表現の用法

条件接続 用法	(a)	仮定条件
	(b)	一般条件
	(c)	事実的条件
非条件接 続用法	(a)	文末詞的
	(b)	提題的
	(c)	評価的
	(d)	助動詞的
	(e)	接続詞的
	(f)	並列的

（中島 1997、1999 より、作成筆者）

表 1 に示されているとおり、中島（1999）における条件接続用法は規範文法における仮定条件と一般条件、事実的条件に構成されており、それ以外の用法は非条件接続用法と位置づけられている。結果として、話し言葉においては、「ば」が最も使用されている一方、「たら」、「と」、「なら」があまり使用されていないことが報告されている。

また、白川（2009）は接続助詞で終わる述語省略表現を言いさし文と呼び、体系化している。その中で、「タラ」と「レバ」による言いさし文を意味的な完結性を持つ言いさし文としてとらえ、願望や危惧、勧めを表すことができると指摘し、後者は前者から派生したものだとして説明している。

(1) ゆき子 久男、まだ寝てんのかしら。

ひらり ほっとけば、あんなヤツ。

（内館牧子『ひらり 1』p.119、下線白川（2009：84））

一方、上記の先行研究が共通している問題点としては、いわゆる「用法」のとりえ方には経験的な証拠に依存するものがあるため、偏った結果が得られる恐れがある。その問題点を解決するために、大量の自然会話データを用いることと、述語省略表現を体系的にとらえることが有効ではないかと考える。

2.2. 発話機能論

まず、話者本位の発話行為論（Searle：1979）に対し、発話機能論（Halliday：1985、山岡 2008）は聴者本位で発話をとらえている。すなわち、話者の意図ではなく、聴者がどのように発話を理解して反応するかに基づいて発話機能を判断するという方法である。次に、発話機能論では、話者が虚言を言わないこと、すなわち誠実性条件が前提とされている。さらに、発話機能論では、発話が相互依存関係にあると見なされ、特に山岡（2008）は会話の基本的な構造は《要求》-《付与》-《容認》だと考え、「連」の概念を提唱している。その帰結として、Searle（1979）の発話行為論で主張されている【対動】と【自告】が同じく参加者の行為を制御する発話と考えられ、合わせて【策動】と呼ばれている。本稿の着眼点は、述語省略表現が会話でどのように使用されているのかということであり、聴者本位の発話機能論に従う。実際のコミュニケーションにおいて、話者の発話意図が聴者に

伝わらないことがよくあり、日本語教育現場への助言を行う際に、話者の発話意図より聴者としてどのように発話を認識しているかを論じる発話機能を用いた方が有効ではないかと考える。

3. 研究方法

3.1. 会話データ

本稿では、宇佐美まゆみ監修（2011）『BTSJによる日本語話し言葉コーパス 2011（トランスクリプト・音声）2011年版』（以下 BTSJ コーパス）⁽¹⁾にある日本語母語話者の会話をデータとする。

3.2. 調査手順

本稿では、三つのステップで調査を行なっている。まずは、述語省略表現の認定基準を規定し、それに従い、データから述語省略表現の抽出を行う。抽出する際に文脈、会話参加者情報、会話の場面も記す。次に、抽出した発話の発話機能を発話機能論の語用論的条件に基づいて判定する。特に、策動においては、下位分類を山岡（2008）に基づき整理する。さらに、非省略表現についてもステップ 1 と 2 を繰り返す⁽²⁾。

3.3. 述語省略表現の認定法

本稿では、条件節による述語省略表現を形式面から定義し、「一つの発話文において、順接条件を表す接続助詞の『ば・たら・と・なら』によって形成される条件節に対する主節において、述語が言語化されない表現」と規定する。したがって、省略文の認定は必然的に一つの発話文内になされる。発話文の概念は、原則、前述した宇佐美（2011）における認定法に従う。ただし、同じ話者による発話は、聴者の相づちや笑いが挟まれる場合、BTSJ コーパスにおいては二つの発話に判定されるが、本稿では一つの発話として扱う。中島（1997、1999）における「文末詞的用法」と前田（2009）における「終助詞的用法」が本稿で扱う述語省略表現の典型例である。なお、「～もあれば～もある」が並列に使用されるように、「ば・たら・と・なら」は条件を表さない他の用法があるため、除外しなければならない。除外する表現は表 2 で示す。

表 2 述語省略表現から除外する形式

そういえば	たとえば	おさらば
たらば	ならば	ともすれば
からすれば	から見れば	いざとなったら
もしかしたら	そしたら	そうしたら
だったら*	じゃなかったら*	と思ったら*
ひょっとしたら	かといったら	からしたら
どちらかといったら	したら	言われてみると
そう言われると	そうすると	そうなると
ともすると	どちらかというと	によると
もしかすると	それなら	なら*
どうせなら		

（*の項目は、文頭に現れるものに限る）

3.3. 調査結果

今回の調査では、述語省略表現は計 236 件観察され、その中で「ば」が 72 件、「たら」が 74 件、「と」が 82 件、「なら」が 8 件である。発話機能については、先行研究で言及された勧めと願望の他にも、依頼、勧誘、意志要求、約束要求、許可要求、依頼の承認、忠告の承認など多くの発話機能が観察された。その件数を表 3 にまとめる。また、非省略表現の発話を抽出して考察した。結果を表 4 にまとめる⁽²⁾。

表 3 BTSJ コーパスにおける条件節の述語省略表現の発話機能

		ば	たら	と	なら
演述	合計	51	41	69	6
策動	助言	12	15	8	0
	依頼	3	6	1	0
	勧誘	0	4	0	0
	意志要求	0	5	0	0
	約束要求	0	0	1	0
	許可要求	1	0	1	0
	依頼の承認	4	3	0	2
	忠告の承認	1	0	2	0
	合計	21	33	13	2
合計		72	74	82	8

表 4 BTSJ コーパスにおける非省略表現の発話機能

	演述	策動	表出	総数
ば	402	135	6	543
たら	1197	147	7	1351
と	1002	136	2	1140
なら	106	22	0	128

4. 考察

本節では、対人配慮、使用頻度と会話参加者間の親疎関係の面から、非省略表現との比較を通じて述語省略表現の特徴を考察する。

4.1. 対人配慮の面から見る特徴

4.1.1. 主張を表す演述発話

今回の調査では、述語を省略することにより、話者の主張が明示されず、意見の対立が回避されることが観察された。例 (2) における述語省略表現は、A が主張の譲歩であり、人間関係をより円滑にするために取られる行動だと考えられる。

(2)

A: <えーと>{>}、何度、もっと行きたいとこなんですけどねー(うーん)、<なかなか>{<}【】。

<中略>

B: あー、あれでも、あの一、結構ほら政情、が不安定だったりとか言う…。

A: ええ、っていうのは、確かに、結構、報道されてたんですけど(うーん)、まあ大体ああゆうのは、局地的なもんで=。

B: =あ、そっかそっか(ええ)。

A: それ、感度が、あの、ちゃんと土地勘とかね(ええ)、そういうの分かればね。

(BTSJ コーパス 初対面の同性同士(男女)の雑談)

4.1.2. 報告要求の演述発話

初対面の人に情報を要求する際に、非省略表現を使うことが一般的だとされているが、今回の調査では、述語省略表現の使用が多く観察された。

(3)

A: お仕事は何なんですか[小さい声で]。

B: えと、しゅう、出版関係なんすけども、それで(え)あの、人のうち、へ、編集(ん)の仕事して。

A: あ、なるほど。

A: <あ、僕は>{>}(ん)、教員です。

B: 何の先生なんですか?。

A: 社会関係の。

B: 社会関係。

A: え、えと、あの、学生、大学生ですか、相手は。

B: はい、そうです。

B: や、出版の方というと<笑い>。

A: えー、えいや、なんで、子どもの本作ってるん(あ、は)ですよ、だか、ん、まだ全然。

(BTSJ コーパス 初対面の同性同士(男女)の雑談)

このように、述語省略表現にしても失礼にならない場合があり、さらに会話をよりコンパクトにしなが、スムーズに進めることができると考えられる。

4.1.3. 依頼への承諾を表す策動発話

策動の類においても対人配慮の効果を持つ述語省略表現の使用が見られる。

(4)

A: 英語教えてもらえないですか?

A: でも忙しいですよ<ねー>{<}。

B: <いえ>{>}いえ、あたしで良ければ<笑いながら>。

(BTSJ コーパス 初対面の女性同士の雑談)

この会話において、A が依頼する際に「B でいい」という意味が含意されていることは自明であろう。それにもかかわらず、B は自分でいいという条件を取り立てて発話している。このような引き受け方は意味の面では蛇足である一方、B の謙遜として対人配慮の効果をも有している。

4.2. 使用頻度から見る特徴

それぞれの形式がどれほど省略表現に使用されているかを明示するために、接続助詞ご

とに述語省略表現の総出現数に占める割合を示していく。Fを頻度、Xを接続助詞、Yを発話機能にすると、下記のような計算式が得られる。さらに、表3と表4からデータを計算式に代入すると、表5の結果が得られる。

$$F(X-Y) = \frac{Y\text{に使用される}X\text{の省略表現の件数}}{Y\text{に使用される}X\text{の省略表現の件数}+Y\text{に使用される}X\text{の非省略表現の件数}} \times 100\%$$

表5 BTSJコーパスにおける述語省略表現が占める割合

	F (演述)	F (策動)	F (合計)
ば	11.3%	13.5%	11.7%
たら	3.3%	18.3%	5.2%
と	6.4%	8.7%	6.7%
なら	5.4%	8.3%	5.9%
平均	6.1%	15.7%	6.9%

表5が示しているとおりに、述語省略表現は非省略表現より、策動の使用頻度が高く、演述の使用頻度が低い。特に、「ば」と「たら」の省略表現が策動に適していることがわかる。

4.3. 親疎関係から見る特徴

以下では、BTSJコーパスにおける会話参加者の情報をもとに、述語省略表現が親・疎の関係においてそれぞれどのように使用されているかを統計的に見ていく。ただし、今回の分析で対象となる親しい人間関係と親しくない人間関係の会話参加者同士によるデータ量に差があるため（親：疎は約54%：46%）、重み付けでその比率Rを比較する方法を使用した。計算式は下記のとおりである。このように計算される値を親疎率と呼んでおく。なお、「疎」のデータ数が0の場合、Rが得られないので、#をつける。結果は表6にまとめる。

$$R = \frac{\text{「親」のデータ数} / \text{「親」の総時間数}}{\text{「疎」のデータ数} / \text{「疎」の総時間数}}$$

表6 述語省略表現の発話機能と親疎関係の関連

		親	疎	合計	R
演述	合計	100	67	167	1.25
	助言	26	9	35	2.41
策動	依頼	6	4	10	1.25
	勧誘	3	1	4	2.51
	意志要求	5	0	5	#
	約束要求	1	0	1	#
	許可要求	2	0	2	#
	依頼の承認	8	1	9	6.69
	忠告の承認	0	3	3	0.00
	合計	51	18	69	2.37
合計		151	85	236	1.48

表 7 非省略表現の発話機能と親疎関係の関連

	親	疎	合計	R
演述	1555	1152	2707	1.13
策動	274	211	455	1.09
合計	1802	1359	3162	1.11

表 6 と表 7 では、R 値が 1 より大きい場合は、該当する項目の述語省略表現は非省略表現より多用されることを意味する。ここで注目したいのは、述語省略表現と非省略表現における演述と策動との親疎率の関係である。結果として、どの発話機能においても、述語省略表現の親疎率は非省略表現より大きくなっているため、親しい関係では、述語省略表現が使用されやすいことが確認された。特に述語省略表現の策動発話においては、R 値が 2.37 であり、平均値の 1.48 より明らかに高くなっているため、策動発話が述語省略表現の形でより現れやすいことがわかった。

5. おわりに

本稿では、BTSJ コーパスの会話資料を用い、「ば・たら・と・なら」節における述語省略表現の発話機能を分析し、非省略表現に対する特徴を考察した。結果として、述語省略表現の発話機能を系統的に提示することができた。また、主張を表す演述発話、報告要求の演述発話と依頼への承諾を表す策動発話において、述語省略表現の使用は親しくない相手に対しても失礼にあらず、対人配慮の効果を有している。使用頻度から見ると、策動において、述語省略表現の使用頻度が高く、演述の使用頻度が低いことが確認された。最後に、会話参加者の親疎関係から見ると、述語省略表現は非省略表現より親しい関係で使用されやすく、特に親しい関係における策動の発話は、述語省略表現で表現されることが多い。

ただし、本稿が用いたデータだけでは場面がまだ少なく、量的にも不十分なところがあったため、今後の課題としては、より多くの場面で収集されたデータを使用して分析したい。また、「ば・たら・と・なら」4 形式間の発話機能にはどのような違いがあるかについても検証していきたい。

注

(1) BTSJ とは、Basic Transcription System for Japanese の略称であり、データの読みやすさに重点を置いて発話の内容や文脈情報などデータの基本情報を記述したシステムである。BTSJ コーパスの特徴は、雑談や討論、勧誘、断り、謝罪、論文指導など多様な場面で行われた計 294 件、総時間約 67 時間の会話が収録され、発話者の母語、親疎関係、性別、年齢などの情報が明記されている点にある。データシートはエクセル表として保存されている。本稿はその中の日本語母語話者による 237 件、約 50.3 時間のデータを対象にする。

(2) ただし、非省略表現の発話機能に関しては、演述、策動などの上位分類のみにする。

参考資料

宇佐美まゆみ監修 (2011) 『BTSJによる日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011年版』(以下 BTSJ コーパス)

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年版」 <http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>, 2017年11月25日参照
- 楠本徹也 (2015) 「中途終了型発話文「～けど」「～ので」の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41 47-60.
- 白川博之 (2009) 『「いいさし文」の研究』くろしお出版
- 高木丈也 (2015) 「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる「中途終了発話文」の出現とその機能」『社会言語科学』第15巻第1号、社会言語科学会 98-101
- 陳文敏 (2000) 「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話—表現形式及びその生起の理由」『言葉と文化』創刊号 125-141
- 中島悦子 (1997) 「自然談話に現れる『と』『ば』『たら』『なら』—非条件接続用法を中心に—」『ことば』18号 現代日本語研究会 108-124
- (1999) 「自然談話に現れる「と」「ば」「たら」「なら」—条件接続用法を中心に—」『言語と文芸』(116) (特集 文学と言葉の間) おうふう 106-131
- 朴仙花 (2010) 「OPIデータにみる日本語学習者と日本語母話話者による文末表現の使用—接続助詞で終わる言いさし表現を中心に—」『言語と文化』217-235
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文：条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 水谷信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」『日本語教育』第69号、日本語教育学会 24-35
- 山岡政紀 (2008) 『発話機能論』くろしお出版
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. London: Edward Arnold.
(山口登・笈寿雄訳 (2001) 『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』くろしお出版)
- Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge University Press. (山田友幸監訳 (2006) 『表現と意味』誠信書房)

(杜曉傑、筑波大学人文社会科学研究所科博士後期課程、duxj225@yahoo.co.jp)